

文 体

茂 松 文 雄

文章を作るということは呼吸や歩行のように本能的なものではない。過去の記憶から文の pattern を繰返し、類推によって色々にわれわれの思想感情に適合するように変化させて文を作るのである。かりに、過去2、3週間に我々が口にしたあらゆる文を正確に記録したとして、これを詳細に検討してみると、恐らくその pattern は意外に多いのではなからうか。長文もあろうし、短文もあろう。構造の上からみると、単文、重文、複文、さらに混文といったものもあろう。機能の上からみると、陳述、命令、希望、疑問、感嘆、祈願等々といったものもあろう。また文体の上からみると、均衡的なもの、棹尾的なもの、散列的なもの、或はそれ等の特徴とも云へる要素を幾分かづつ適当に混淆したものもあって多岐多様なものとなることは、統計によらなくても、想像に難くない。用いられる語彙は主として話者自身の能力に応じて選択をする。語法も滅多に自己独創のものではなく、直接又は間接に過去からいつの間にか伝承してきたものであるし、文型にしてもある限られたものを記銘してきているであろう。その多寡はその人、その人の生得の言語能力に因って決まるであろう。ある作家はその作家独特の言い方をする。それは避けることの出来ない運命のようなものである。その文をどんなに分析してみても尽すことの出来ぬ微妙な雰囲気包まれている。読者は唯それを感得することがやっとであって、はっきり説明は出来ない。然しある作家の文体も慣れるに従って、その文章の解釈も容易になって来る。文体も亦散文ばかりでなく、韻文についても云えることである。

漱石、鷗外の文章を読み慣れている人には一読して、大体の見当がつく

のではなからうか。Keats が Tennyson と違うことは、その詩を読み慣れた人には、その識別をすることはそんなに困難なことではなからう。その点散文よりも韻文の方が、文体の特徴が一層はっきり感じられる。

1

Perhaps the self-same song that found a path
 Through the sad heart of Ruth, when, sick for home,
 She stood in tears amid the alien corn;
 The same that oft-times hath
 Charm'd magic casements, opening on the foam
 Of perilous seas, in faery lands forlorn.
 ODE TO A NIGHTINGALE, VII, 65-70

上の最後の2行、「寂寥たる仙境の潮沸る荒海に開く魔法の窓を屢々魔力に縛りし歌声」の中に Romanticism の精神を湛えているこの詩行は Keats でなければ読む人の心を把むことの出来ないところである。

Now half to the setting moon are gone,
 And half to the rising day;
 Low on the sand and loud on the stone
 The last wheel echoes away.
 COME INTO THE GARDEN, MAUD

この均整のとれた文体と、流麗な〔1〕音の心地よい cross rime には Tennyson を感ずる。

Sweet Helen, make me immortal with a kiss.
 Her lips suck forth my soul; see where it flies.

「優しいヘレンよ、口づけもて永遠の命を私に与えてくれ。彼女の唇が私の魂を吸い出してしまう。あゝ、飛んでゆく、魂が。」この2行は Marlowe の Doctor Faustus (1588上演) 中の有名な科白であるが、J. M. Murry は The Problem of Style (1922) p.7 に “No one else could have written them; not even Shakespere. When Shakespere was writing in the style of Marlowe he was incapable of this magnificence; when he became

capable of it he had worked out a style of his own, utterly different from Marlowe's”

「ほかに誰もこの2行のような文の書けるものはいないであろう。Shakespeare でさえ書けるものではない。Shakespeare が Marlowe の文体で書いても、こんな荘麗さでは書かないであろう。荘麗さが出せた時には、Shakespeare 自身独特の文体で書く。彼は Marlowe とは全然別な書き方をするであろう。」つまり、例の名句 *The multitudinous seas incarnadine* (*Macbeth* II ii. 62) といった *magnificence* である。このような古今の名句を求めていたのでは、文体に近づく自然のゆき方ではない。格調の高い名文でなくとも、不図口に出るさゝやかな言い廻しの中にでも、しみじみとした文体の妙味が、しかも、現代にまでも人口に膾炙されて生きていて読者の心を親しく捉えるものがある。そのようなのが文体を知るのによい。*Macbeth* の Act III, sc.I. 41~42 の、

Let every man *be master of his time*
Till seven at night; to make society
The sweeter welcome, we will keep ourself
Till supper-time alone; *while then, God be with you!*

「夜の7時までは、めいめい随意に、時を過すがよい。一段の愉快を以て、宴会を迎へるために晚餐時刻までは皆に離れているよう。それまでは、御機嫌よう！」

be master of の句は現代語にも根強く生きている。*while*=until (Wright; *The English Dialect Dictionary*) 今日 Irish, Scotland, North England, Midland の Dialect に広く、*till* 又は *until* の意で用いられている。私は2年前 Manchester 郊外の Wilbraham Road の flat の食堂で中年の Irish maid が “Please, sir, wait *while* next May.” と言ったのを深い印象で記憶している。尚 “God be with you!” は ‘God b’ with ye!’ を経て、‘Good b’ye!’ となって、今日に及んでいる。(Skeat, *Etymological Dict.*)

自然の感情の流れにのって口走る fool 等の端役の witty な epigrammatic な言句の中にその人独特の文体の要素が見出される。

Robert Herrick (1591-1674) の詩に、

‘Gather ye rosebuds while he may.’ 「集めよバラを、逃すな時を。」

‘Strike the iron while it is hot’ を想起する文体のひびきがある。

‘Come, Anthea, let us two’ 「アンシャよ、来なさい、二人して。」

‘Get up, get up for shame! the blooming morn.’ 「起きよ、寝坊よ、何してる、花薫る朝なのに」と云った調子は Herrick 調として頭に残る、初めの ‘gather ye rosebuds’ が古く Latin 詩調からであることはどうでもよい。此等 imperative に始まる格調に馴染むと、Tennyson の流麗な、
Come into the garden, Maud,

For the black bat, night, has flown,

Come into the garden, Maud,

I am here at the gate alone;

And the woodbine spices are wafted abroad,

And the musk of the roses is blown.

が、一聯また一聯と記憶に蘇生り、さらに、

I said to the lily, There is but one

With whom she has heart to be gay,

When will the dancers leave her alone?

She is weary of dance and play,

Now half to the setting moon are gone,

And half to the rising day;

Low on the sand and loud on the stone

The last wheel echoes away.

の…to the setting moon…to the rising day のふり分けの対句に equipose と symmetry による metrical な美を求める詩的本能を満たし、遠く Hebrew, Greek, Latin その他古今の諸語に根を持つ、英詩特有の雰囲気醸し出す。その因って来たる所は、parallelism, anthesis で二つの類似思想を表わす原始印欧語の Sentence-type に今尚根深く残る、

‘Like master like man,’ ‘More haste less speed,’ ‘First come first served,’

‘Least said soonest mended,’ ‘Easier said than done,’ と云った諺の中に育った英語国民の意識の根底に宿してゐる此等の patterns が彼等の話や文

章に自ら蘇生って、彼等の心に詩情の銀線を奏でる因ともなり、日常の彼等の言語活動の源泉ともなるのではなからうか。

2

さきに、英詩の gleanings とも言うべき断片を拾って、文体を考察したが、次に散文について文体の趣きを考察してみたい。

Simeon Potter (1898 -) は“Sentence”の中で次の様に述べている。

English sentence-patterns show infinite variety and loose, periodic, and balanced are only relative terms. The best writers shape their sentences in such a way as to give just the right degree of emphasis, and this they achieve, in written language, by word order alone. Now it is not surprising that in a language like ours, with such a long history behind it, some patterns have become blended, mixed, or, to use the technical term, 'contaminated,' and that some of these 'contaminations' have been sanctioned by usage.

「英語の文型は（屈折は少なくなったが所謂 functional な語その他で一筆者註）無限に変化に富み、散列、棹尾、均衡等と云っても、これは唯相対的なものに過ぎない。一流作家となると適正な強調を要する場合、文語では語順のみに訴えて当意即妙に表現の効果をあげている。長い歴史を背景としているので、文型の混交が行われ、その道の術語を以て言うなら、所謂混成 (contamination) によって、柔軟な表現が行われることは今更ら驚くにあたらず。」従って、文調と云うものは、作家、作家でその人らしい書き方ということになり、狭い意味での文体というものが、語句、文章に自然に醸成されていて、それになれてくると読者は、理屈を超えて、それが感得出来るのである。Dickens を読むとその誇張的な表現の特徴を把握し、どこことなく作者の人柄までも感じ取るのである。特異な経歴を持つ Conrad では、非常に力の籠った、含みのある表現が重ねられて、彼らしい文体がその内容と共に読む人の心を打つ、

A completeness without a clue, and a stealthy silence as of a neatly

executed crime, characterize this murderous disaster, which, as you may remember, had its gruesome celebrity. The wind would have prevented the loudest outcries from reaching the shore: there had been evidently no time for signals of distress. It was death without any sort of fuss. The Humburg ship, filling all at once, capsized as she sank, and at daylight there was not even the end of a spar to be seen above water. She was missed, of course, and at first the Coast-guardmen surmised that she had either dragged her anchor or parted her cable some time during the night, and had been blown out to sea. Then, after tide turned, the wreck, must have shifted a little and released some of the bodies, because a child little fair-haired child in a red frock—came ashore abreast of the Martello tower. Amy Foster, p.24.

(手懸り一つ残さぬ完全犯罪の手口のように、物音一つさせず、てきぱきとやってのけたゾットとするこの災害は、当時評判な奇怪な海難事件として未だに記憶に新たなところであろう。乗客がどんなに呼んでも、風の音に遮られて岸には届かなかつたろう。明らかに遭難信号を出す暇もなかった。大騒ぎにもならぬ死であった。ハンブルグの船はたちまち浸水、沈没しながら、転覆して、夜明けには、円材の切れ端一つ水面には見かけられなかった。船は勿論行方不明だった。始めは沿岸警備員は船が錨をひきづつて流されたか錨を切って夜の間暫く流れて、外海に漂い出たかと推測した。それから潮の流れが変わって、船の残骸は少し移動し、溺死体の浮き上がったものもあったに違いない。というのは子供の——赤いワンピースを着た小さい金髪の死体が「石造の円形砲塔」わきの渚に打ち上げられていたからである。)

“Youth”の終りの一節に、

I need not tell you what it is to be knocking about in an open boat I remember nights and days of calm when we pulled, we pulled, and the boat seemed to stand still as if bewitched within the circle of the sea horizon. I remember the heat, the deluge of rain-squalls that kept us bailing for dear life, I remember sixteen hours on end with a month dry as a cinder and a steering-oar over the stern to keep my command head on to a

breaking sea.

(覆いのないボートで行方も知れず漂流してゆく気持といったらどんなものか云うまでもなからう。僕は憶えている。夜も昼も風は全く凪ぎ、僕等は漕ぎに漕いだ。それでいてボートはちっとしたまゝで進んでいないようなのだ。まるで海の水平線の輪の中に魔法にかけられたみたいだ。僕は憶えている。ひどい暑さ。スコールがざっときて、洪水となり、僕等はいつまでもボートの垢を命がけで汲み出さねばならなかった。それからまた憶えている。16時間たて続けにオールを握って、口はからからに渴き切ってしまう、じっとスターンに座を占めて、砕けかゝる波に舳を向けておこると初めての船長としての指揮をとり続けた。) 彼の半生にわたる海洋生活から生れる叙情的な所謂 *Conradesque Style*こそ確かに *Hardy* にも *Galsworthy* にも感じられぬ独特の文体であるが、*The Nigger of the Narcissus* (1898), *Typhoon* (1903), *Youth* (1902), *Almayer's Folly* (1895), *Under Western Eyes* (1911) 等いづれも読むほどに、内容が必要とする以上に文体に意を用いているのを感じる。彼の文が時には聊か文体過剰の気味を感じさせることがある。mother tongue でない英語を彼が自在に駆使しているその表現の巧みさには感服の外はないが、どんなに巧みであっても、所詮は彼の母語でないので、先天的な靈感から来るものに欠けるとでも云うか、生き活きた文字で、自分の経験を心技一如となって表わそうと努めるので、どうしても彼が青年時代の体験で身につけた語彙を総動員して、海の生活から得た *nautical slang* や *nautical terms* などの *idiomatic usage* が積み重ねられて、過剰な文体と相俟って、表現がなんとなく、しつこい。尤も会話等の運びはきびきびして軽快である。しかしこの文体の濃厚と内容のこまやかさが、*Conrad* にあっては不思議と巧みに溶けあって、彼独特な香りを漂わせている。彼の言う、

“My task... is by the power of the written words to make you hear, to make you feel—it is, before all, to make you see.” (From the preface of the *Nigger of the Narcissus*)

(「見せること」, 何よりも「先づ見せること」) が彼の芸術の本旨なのだ

から、心中に浮ぶ追憶を一つでものがすまいと克明に描き出そうとしている。

3

文章もこれを建築に譬えることが出来よう。全体の家の造りにも、points があって、勝手、台所、居間、客間、それぞれに応じて、雑作の適当な素材が使われねばならぬ。客間、特に床の間は何の木、床柱、欄間は何と特に精撰された木材で細心な配慮と結構の美を凝らさねばならぬが、他は簡素な構えで、あっさりしたものが望ましい。文章にしても、終始美辞麗句で精緻の限りを尽したのでは、読む者は息つく暇もない。

文体もその特徴を多少分析的に意識するようになると作者の mannerism とされるものにも気がつき始める。漠然と親しみを覚え、新鮮な感を受けた喜びも次第に薄らぐことにもなる。

そこで、Conrad に食傷した眼を一転して、生粋の英国籍であった Conrad 夫人が夫を追憶して書いた、Joseph Conrad: As I Knew Him の一文を味ってみる。彼女は London 郊外の教養ある質実な家庭の出で、聡明な婦人であった、と Conrad の友人 Richard Curle が記している。彼女の文体は何の飾りもない、伸びやかなもので、夫 Conrad の気性を活き活きとした筆致で描いている。humorous な内容と共に素朴な文体が読者の心を捉える。

Conrad had also a bad habit (acquired at sea) of making bread pellets and flinging them about the room; sometimes flew in such unfortunate directions that people might well have been forgiven for thinking themselves targets. I have seen them fly into the soupplates and glasses of our guests. The more excited or irritated he got, the quicker flew the missiles, and those in the line of fire would look apprehensively at their host. Carefully choosing my time I pointed out to him that he had this reprehensible habit, and it was agreed between us that I should at such moments call his attention to it by saying something quite irrelevant to the subject of conversation.

Once we had several American guests to lunch; I think we numbered ten round the table. The talk had turned to railways and railway stations. At first I was deep in conversation with my neighbour over some family matter, and I did not notice the growing excitement of my husband, or the nervousness betrayed by my guest. Something had raised Conrad's ire with a vengeance. Bread pellets flew in all directions and with a rapidity that was vastly disconcerting to the whole table. One or two actually struck the maids serving lunch. I leaned from my end of the table, and made one or two ineffectual attempts to attract his attention. At last I caught his eye, and said distinctly, "Conrad, your tie is crooked." He half started from his chair, slapped his hand sharply on the table, and frowning heavily, said in a terse whisper, "This, my dear, let me tell you, is not the time or place to talk about my personal appearance!"

It was plain he had quite forgotten our compact, and each time I caught his eye he only looked sadly reproachful. Still my object was accomplished; the tension was relaxed. When lunch was nearly over I caught a sudden smile on his face, and I saw he had at last realised the object of my remark.

Jessie Conrad, Joseph Conrad As I Knew Him, p. 19-21

(それにまた Conrad にはパンをまるめて、部屋中とこまわすはじき飛ばす(船でおぼえた)悪い癖があった。時にはそのつぶてはとても運の悪い方向に飛び、客人達が自分をねらって飛ばしたと思っても万更らとがめるわけにゆかないようなことがあった。私はそのつぶてが客人達のスープ皿やグラスの中に飛びこむのを見た。主人が話にならなくなればなるほど、いらだてばいらだつほど、だんだん頻繁に飛び、つぶての飛ぶ方向に座っている人々は主人を不安の眼で眺めるのだった。気をつけていゝ頃あいを見計らって、主人にこの不屈きな癖のあることを指摘した、そして私はこんな時には会話の話題に全く無関係なことを言って、その悪い癖に彼の注意を促そうと、お互の間でとりきめていた。ある時、私達は幾人かのアメリカ人の客を昼食に招いた。その時はテーブルを囲んで十人ばかりの客がいたようだった。話題はなんでも鉄道や駅のことになっていた。初めは私は隣にいた方と何か家族のことですっかり話しこんでいたので、主人

が興奮してゆくのも、客人たちのびくびくした顔色が気色ばってゆくのも気がつかなかった。何かの話でコンラッドの怒がかって燃えたつたらしい。パンつぶては四方八方に飛んだ、そして満座の人達がすっかりどぎまぎしてしまう程の速さで飛んだ。そのつぶての一粒、二粒は食事の給仕をしていた女中にも実際当たった。私はテーブルの端から乗り出して、夫の注意を引こうと一、二回やってみたが駄目だった。とうとう私は夫の眼を捕えた、そしてはっきり言った。「あなた、ネクタイがゆがんでいますわよ」。すると夫は椅子からなつかば飛び上って、片手でテーブルをびしゃりと打って、ひどく渋い顔つきになって、きびきびした小声で、「いゝかね、お前、今は私の身なりのことなどかれこれ言う時でも場所でもないよ」と言った。

明らかに彼は私たちの取り決めなど忘れていた。そして夫の眼を捕えるたびに、彼は唯悲しげに私を責めるような顔つきをした。それでもやはり私の目的は達せられた。緊張の色は和らいだ。食事が殆んど終わった頃には彼の顔に急にほゝえみの浮ぶのを見た。そしてとうとう私の言ったこと目的をそれと悟ったことがわかった。) この一文を読む読者は、文体が何の衞いも、技巧もなく淡々と書かれていて、London に生れ育った夫人の Southern English の speech sound までが acoustic image となって彷彿するように感じられる。Conrad 自身フランス語は随分流暢であったが20歳で漸く master した英語については終生その語法については迷うことがあったと友人 Curle が洩らしている。

4

文体研究の対照として「種の起源」で有名な Charles Robert Darwin, (1809-82) のような科学者をあげることは奇異な感を抱く向きもあろう。実は Darwin の第三子 Sir Francis Darwin が編んだ, “Autobiography of C. Darwin” (Watts & Co. London 1929. The Thinker’s Library, No. 7) の文体に深い感銘を受けたからである。此の自叙伝体の彼の追憶記は、編

者が述べているように、 Darwin が窃かに子孫のために少しづつ書き残しておいたもので、他日それが掛けにされるとは夢想だにしなかったものである。 Darwin を非凡な頭脳に恵まれた超人的才幹の持主かと想像するかも知れぬが、意外にも「自伝」によると、 Cambridge 卒業の際は優等の圈内にも洩れ、あまつさえ、幼少の頃から蒲柳の質でありながら、これを克服して偉業をなしたのである。殊に徳性の面では自然科学者としては稀にみる人間性の深い面を持った人であることが自伝の片言隻語のうちに滲み出ている。学説を著はすに際して最も苦心した一つは、自分の文が誰にでも理解されるようにと常に努めたとのことである。このような文章上の多年の修練が行文を平明卒直なものとした。随所に珠玉の様に光彩を放つ彼の人柄とこれを表わす humorous な表現とが相俟って実に立派な文体をなしている。全文を読んで、適例を一、二拾ってみた。彼を立派な医師に教育しようと考えていた父の意図に反して、彼が自然科学者を志すに到った動機が伝記の始めの方に興味深く記されている。

At one time I had at least a dozen patients, and I felt a keen interest in the work. My father, who was by far the best judge of character whom I ever knew, declared that I should make a successful physician,—meaning by this, one who would get many patients. He maintained that the chief element of success was exciting confidence; but what he saw in me which convinced him that I should create confidence I knew not. I also attended on two occasions the operating theatre in the hospital at Edinburgh, and saw two very bad operations, one on a child, but I rushed away before they were completed. Nor did I ever attend again, for hardly any inducement would have been strong enough to make me do so; this being long before the blessed days of chloroform. The two cases fairly haunted me for many a long year.

(私は一時少くとも12人の患者を受持っていた。そして治療の仕事にも深い興味を覚えた。父は誰よりもすぐれて人の性格を見ぬく慧眼を備えた人であった。彼は私が医師として成功すると断言した。——父がこう云ったのは患者が多くつく医師であると云う意味であった。父の持論は医師と

して成功する要素は患者に信頼感を起させるというにあった。しかし、父は私にはわからなかったが、どうやら私にその信頼感を患者に抱かせるものがあると信じこんでいたからであった。私はまたエジンバラ大学の付属病院で2度ほど手術の現場に立ち会ったことがある。とてもひどい手術であった、一つは子供の手術だ。だが二つとも手術が終らぬうちに私は我慢しきれず、逃げ出してしまった。私はこれをみてもう2度と手術には立ち会まいと決心した。というのはそれからと云うものなんと勧められても、私には手術に立ち会う勇気が出なかった。この頃はまだ有難いクロロフォルムが用いられぬ随分以前のことであった。この二つの手術のことはその後長年私の心にかかなり強く、悪夢のように心に焼きついていた。) Darwinにはクロロフォルムのなかった当時の荒い手術をやったのけるには耐えられない温かい心の人だったことが短い文面に溢れている。そのような性格から自然科学の動物学に彼の心は強くひかれいいつらしい。始めは特に昆虫の採集に夢中になったようである。その熱心振りが次の文中に彼らしく humorous に描かれている。

But no pursuit at Cambridge was followed with nearly so much eagerness or gave me so much pleasure as collecting beetles. It was the mere passion for collecting, for I did not dissect them, and rarely compared their external characters with published descriptions, but got them named anyhow. I will give a proof of my zeal: one day, on tearing off some old bark, I saw two rare beetles, and seized one in each hand; then I saw a third and new kind, which I could not bear to lose, so that I popped the one which I held in my right hand into my mouth. Alas! it ejected some intensely acrid fluid, which burnt my tongue so that I was forced to spit the beetle out, which was lost, as was the third one.

(しかし、ケンブリッジの研究でも昆虫採集程熱心に又それ程楽しんでやった仕事はなかった。それはただ採集をするという熱だけであった、というのは昆虫を解剖するということはしなかった。それに昆虫の特徴を公表されている出版物と比較研究することは滅多にしたことがなかった。しかし、昆虫にはなんとかその名称はつけて貰った。自分の熱心さの証拠を

次に記してみよう。或る日私が古い樹皮をひっぱぐと、2匹の珍らしい甲虫が現れた。まづ両手に一匹ずつ捕えた。すると三匹目の新種が出てきた。それを逃がすには忍びなかったので右手に持っていたのを口の中にびよいに入れてしまった。すると、どうでしょう！ そいつが何やらひどく苦い液汁を吐き出したではないか。その苦汁で舌が焼けつくように苦かった。私はその甲虫をとうとう吐き出してしまった。三番目の虫も一緒に逃がしてしまうこととなってしまった。

なんと無邪気のうちにもユーモラスな文であろう。ユーモラスな書き方のなかに彼が採集に夢中であった様子が躍如としている。読む人の心も自然に採集者の気持になってしまう。取り逃がした虫を惜しむ「二兎を追うもの一兎も得ず」の心境が淡々とした筆致で書かれている。これこそ正に偉大な科学者その人の真の姿ではなからうか。この天衣無縫の文体のなかに Darwin の人柄が溢れている。この自伝の中にはところどころにこの種の彼独特の humour がたくまない文体で異彩を放っている。文体とは作り上げるものではなく、その人の人柄を通して、自ら発露されるものである。

5

W.S. Maugham (1874-1965) が *The Summing Up*, (1938) に Swift (1667-1745) の散文について次の様に述べているのは衆知のことである。

It is a tiresome allegory and the irony is facile. But the style is admirable. I cannot imagine that English can be better written. Here are no flowery periods, fantastic turns of phrase, or highflown images. It is a civilized prose, natural, discreet, and pointed. There is no attempt to surprise by an extravagant vocabulary. It looks as though Swift made do with the first word that came to hand, but since he had an acute and logical brain it was always the right one, and he put it in the right place. The strength and balance of his sentences are due to an exquisite taste. As I had done before I copied passages and then tried to write them out again from memory. I tried altering words or the order in which they were set.

I found that the only possible words were those Swift had used and that the order in which he had placed them was the only possible order. It is an impeccable prose.

(彼の作品は陳腐な寓話である。諷刺も軽妙である。然し文体はすばらしい。私は英語でこううまく書けるとは思いもしなかった。こゝには飾った美文も、奇想天外な言いまわしもなく、誇張した表現もない、洗練された散文で自然に、きびきびと書かれている。仰山なことばで人の意表を衝こうとするところなどない。一見 Swift は思いついた言葉で、なんのぞうさもなく書いているようだが、鋭い論理的な頭脳の持主であったから、常に適切な言葉を適切な場所に用いている。文の強弱の均衡は彼の絶妙な天賦の嗜好に因っている。私は以前よくやったように行文をひきうつし、それから記憶にたよって復文を試みようとした。用語や語順をもとのものとは別なように改めようとしてみた。すると唯一の可能な言葉も語順も、彼のものよりほかには、あり得ないということが解った。それは一点非の打ち所のない散文なのである。)

Maugham の言っているように Swift の文には少しの無駄もない。余計な形容のことばなど一つとしてない。一見無雑作できびきびして、現代のわれわれが読んでも世紀初期の文章とは思えない。勿論 Obsolete な語法もあるにはあるが、古臭い感じはうけない。Maugham 自身も認めているように、彼の文体のきびきびしているところは確かに Swift の影響である。こゝに感ずることは彼と殆んど時代を同じくする Daniel Defoe (1660-1730) の Robinson Crusoe (1718) の所謂 loose sentence (散列文) の文体である。平易な conversational な調子で、作者は第一人称で静かに読者に話しかける。自叙伝風な話の運びは factual と同時に real な気持ちに読者を誘う。

先づ両者の話の書き出しを並べて、その文体の酷似するところを検討する。

'I was born in the year 1632, in the city of York, of a good family, though not of that country, my father being a foreigner of Bremen, who

settled first at Hull: he got a good estate by merchandise, and leaving off his trade, lived afterwards at York, from whence he had married my mother, whose relations were named Robinson, a very good family in that country, and from whom I was called Robinson Kreutznaer; but, by the usual corruption of words in England, we are now called, nay, we call ourselves, and write our name, Crusoe; and so my companions always called me.'

Swift の文は Gulliver's Travels の第三篇第一章の書き始めの所である,

I had not been at home above ten days, when Captain William Robinson, a Cornish man, Commander of the Hope-well, a stout ship of three hundred tons, came to my house. I had formerly been surgeon of another ship where he was master, and a fourth part owner, in a voyage to the Levant; he had always treated me more like a brother than an inferior officer, and hearing of my arrival made me a visit, as I apprehended only out of friendship for nothing passed more than what is usual after long absences. But repeating his visits often, expressing his joy to find me in good health, asking whether I were now settled for life, adding that he intended a voyage to the East Indies in two months; at last he plainly invited me, though with some apologies, to be surgeon of the ship; that I should have another surgeon under me besides our two mates; that my salary should be double to the usual pay; and that having experienced my knowledge in sea-affairs to be at least equal to his, he would enter into any engagement to follow my advice, as much as if I had shared in the command.

Defoe の文と同様 Swift の文体も平明自然で、読む人を、いつの間にか話の中に誘う。単語も、例へば、Captain, commander, master 等いづれも船長の意味であっても、その場所、場所に応じて微妙な使い分けをしている。両者の文体は時代的には殆ど同じである。文体は loose-sentence で書かれているので酷似している。内容は後者は Satire であるが、共に Romanticism の時代に入ろうとする18世紀初頭の英国人の「海へ憧れる」時代思潮と共に海洋知識が多く、一層読者の感興を唆るのである。

こゝで眼を転じて、今世紀の奇蹟の一つと云われる三重苦を克服した Helen Keller (1880-1968) の自叙伝とも云うべき *The Story of My Life* の文体に触れてみる。彼女の文章は既に多くの批評家の指摘する所である。用語においても、文体についても洗練されていると同時に正確極まりなく、且つ洗練されていて、盲聾の人の手になったものとは到底信じられぬほどである、否むしろ盲聾の人なればこそ、目明きの世界ではとても想像も出来ぬ神秘とも云へる幽玄さと叡智をもって書いている文体には、全く畏敬の念に打たれる。

It is with a kind of fear that I begin to write the history of my life. I have, as it were, a superstitious hesitation in lifting the veil that clings about my childhood like a golden mist. The task of writing an autobiography is a difficult one. When I try to classify my earliest impressions, I find that fact and fancy look alike across the years that link the past with the present. The woman paints the child experiences in her own fantasy. A few impressions stand out vividly from the first years of my life; but "the shadows of the prison-house are on the rest." Besides, many of the joys and sorrows of childhood have lost their poignancy; and many incidents of vital importance in my early education have been forgotten in the excitement of great discoveries. In order, therefore, not to be tedious I shall try to present in a series of sketches only the episodes that seem to me to be the most interesting and important. (Helen Keller, *The Story of My Life*, chap. I)

(私はなんだか怖い気持で生涯の身の上を書き綴ります。私の子供の頃に黄金色の霧が懸っているのを払いのけようとする、云ってみりや、何か迷信でも払いのけるような躊躇を感じます。自叙伝を書く仕事はむつかしいものです。最も幼い頃の数々の印象を分類しようとする、過去と現在をつなぐ歳月の彼方に事実と夢とが渾然一つになっているのです。

大人というものは子供の時の経験を自分で作った幻想で描こうとするものです。2, 3の印象だけが最初の数年とはくっきり際立って見えるけれど、その他のものは牢獄の影がさしている、その上、子供の頃の嬉しかったことや悲しかったことは、多くその頃の激しさが消えている。幼少の頃の私の教育で肝心であった多くの出来ごとにも重大な色々の発見の大き過ぎに忘れられてしまいます。そこで話が退屈に流れないために、私にとって最も関心あり、重要だと思われる挿話だけをはしよって順序を立て申しあげてみることにしましょう。)

目明きであつたら、彼女の如き特異な生涯の自叙伝を書き始めるにあたっては、なまじっか見たこと聞いたことが、雑然とした体験や種々な感情に圧倒されて、どこから、どう書き始めてよいか判らなくなってしまうであろう。整然とした彼女の頭脳は先づ伝記を書くことの困難を冷静に認め、盲聾という一身に降りかゝった大事件を簡明に、しかも含蓄ある文体で秩序立てて述べる。その手際の鮮かさは、伝記記述の困難どころか、読む人をぐいぐいと話の中へひきこんでゆく。彼女の心身の発育に従って描かれてゆく2, 3の挿話にその文体を鑑賞することとする。

One day some gentlemen called on my mother, and I felt the shutting of the front door and other sounds that indicated their arrival. On a sudden thought I ran upstairs before any one could stop me, to put on my idea of a company dress. Standing before the mirror, as I had seen others do, I anointed mine head with oil and covered my face thickly with powder. Then I pinned a veil over my head so that it covered my face and fell in folds down to my shoulders, and tied an enormous bustle round my small waist, so that it dangled behind, almost meeting the hem of my skirt. Thus attired I went down to help entertain the company. (Ibid, chap.II.)

(ある日、数人の方が母を訪ねて来ました。私はドアが閉まるのを感じた。客人たちがお着きになったことはその物音でそれとわかりました。ふと思いついて、誰もとめぬまに階段を駆け上って、来客のときの晴着と思われるものをひっかけました。私はほかの人達がすることをかねがねわか

っていたものらしく、鏡の前に立ち、頭に香油をふりかけ、顔には白粉を厚く塗りました。それからベールを頭にピンでとめました。ベールは顔を被い、肩の上に重なり合って下りました。小さな腰には途方もない大きな腰当を縛りつけました。腰当ては大きいのでうしろにぶら下り、私がいっているスカートの縁りと殆どすれすれになりました。こんな風に衣裳を着込んで、お客さまのもてなしを助けるつもりで階下におりて行ったのでした。) 女史は自らを self-asserting な性格の子であったと云っているように、客の持て成しに少しでも協力しようと、自分の眼の見えぬのもまだ強く意識していなかったと述懐している。一途に自分の周辺の人々を見習って客を歓待しようとしているいぢらしい可憐な少女の姿が文体の中に彷彿し、「笑いの中に涙を誘う」 humorous な愛らしさが感じられる。

上記2文は Helen が22歳の時に出版された自叙伝からのものである。こゝで、どうしても彼女の生い立ちに少しふれておく必要を感じる。彼女は生後19ヶ月の時に一種の熱病で視、聴両感覚を一度に失い、7歳の時に Boston の Perkins 訓盲院から派遣された21歳の Anne Sullivan に、片時も身边を離れず、奇蹟ともいえる教育をうけたのである。Annie (と云う愛称でも呼ばれる) は決して完全無欠な女性ではなかったが、彼女を得たことは、Helen には天与の恵みであった。Annie は Irish の移民の子で、こうと思えば、徹底して、事にあたり、これを貫徹せねばやまない気性と情熱の持ち主であった。Helen の才能を最大限に伸ばすのに彼女は全霊全能をかけたといわねばならぬ。こゝでは唯、Helen が The Horace Mann School を経て、Harvard を目明きの中にあつて、優等の成績で卒業したことのみを付記するにとどめる。

Helen の文を読むと彼女の師 Anne の薫陶のほどが滲み出ている。

I had now the key to all language, and I was eager to learn to use it. Children who hear acquire language without any particular effort; the words that fall from others' lips they catch on the wing, as it were, delightedly, while the little deaf child must trap them by a slow and often painful process. But whatever the process, the result is wonderful. Gradually

from naming an object we advance step by step until we have traversed the vast distance between our first stammered syllable and the sweep of thought in a line of Shakespeare. (Ibid, Cap. VI)

(今では、私はあらゆる言葉の鍵が手に入った、それで実際にそれを使ってみたくて仕方がなかったのです。耳の聞える子供達は何等特に努力をしなくても言葉を習得する。耳の聞える彼等は、人の口から飛び出てくる単語を、言わぬ、楽しく捉えさえすればいゝのに、耳の聞えない子は暇のかゝる、しかも、しばしば骨の折れるやり方で単語を罫にかけるように捕える。しかし、そのやり方がどんなやり方であるにせよ、その結果はすばらしい。物に名前をつけるということから徐々に一步一步と登山家が岩壁をよじるように、たどたどしい一音節一音節からやがてセクスピアの詩行の流暢な思考の流れえと耳の聞えぬ私達は辿りつくのです。)

聾啞の子供の世界からは、耳の聞える子供たちは楽しそうに人々の口から飛び出てくる言葉を捕えるように思われる、と記している。眼の見えぬ耳の聞えぬ彼等が言葉を習得する努力の大きいことと、その結果の如何に大きくすばらしいかをことば少く力強く描いている。この文体の簡素で、人に迫る力の大きいことはこの辛苦の体験者にして始めて可能なことであるう。

Miss Sullivan は始めは必ず相手の掌に、例へば、「水」なら、w-a-t-e-r と綴りながら、同時に冷たい水を触覚に訴えて教えた。これは有名な逸話として広く知られている。Helen は Anne の努力で点字の読み書きを習得し、さらに指話法によって何でも話せるまでになる。The Horace Mann School に入学するに及んで発声法を習得し、6年後には声を出して話せるまでになっている。Harvard で学位を授けられた時には、「学位は自分より先きに戴くべき人がある」とて、講堂の一隅に、ハンカチで顔をおもっていた、Miss Anne Sullivan を推したという。

文体の本論を逸してしましたが、最後に言葉の習得のうちで、抽象的な概念を表わす単語の習得には到底目明きの想像も及ばぬ苦心をしている。彼女は実に克明、平易な文体でこれを記している。

At first, when my teacher told me about a new thing I asked very few questions. My ideas were vague, and my vocabulary was inadequate; but as my knowledge of things grew, and I learned more and more words, my field of inquiry broadened, and I would return again and again to the same subject, eager for further information. Sometimes a new word revived an image that some earlier experience had engraved on my brain.

(Ibid, Chap.VI)

(始め、先生が何か新しいことについて話される時には、私は余り質問はしません。それで私の考えも漠然としていて、単語の力も不十分です。しかし、事物の知識が増すにつれて、段々単語もふえ、質問の範囲も広まりました。それで同じ問題を教わってもそのことをもっと深く知りたくて、同じ問題に何度も戻りました。時によると、新しく習った単語が、何か以前頭に深く刻まれていた経験の像を生き返らせるのでした。)

I remember the morning that I first asked the meaning of the word, "love." This was before I knew many words. I had found a few early violets in the garden and brought them to my teacher. She tried to kiss me: but at that time I did not like to have any one kiss me except my mother. Miss Sullivan put her arm gently round me and spelled into hand, "I love Helen."

"What is love?" I asked.

She drew me closer to her and said, "It is here," pointing to my heart, whose beats I was conscious of for the first time. Her words puzzled me very much because I did not then understand anything unless I touched it.

I smelt the violets in her hand and asked, half in words, half in signs, a question which meant, "Is love the sweetness of flowers?"

"No", said my teacher.

Again I thought. The warm sun was shining on us.

"Is this not love?" I asked, pointing in the direction from which the heat came. "Is this not love?"

It seemed to me that there could be nothing more beautiful than the sun, whose warmth makes all things grow. But Miss Sullivan shook her head, and I was greatly puzzled and disappointed. I thought it strange that my teacher could not show me love. (Ibid)

(私、初めて「愛」という言葉の意味をたずねたことを覚えています。これは私がまだ沢山ことばを知らなかった頃のことでした。庭に早や咲きの堇を2つ3つ見つけました。先生のところに持って行くと、先生は私に接吻しようとされました。その頃私は母以外の人にキスされるのは嫌いでした。サリバン先生は腕をやさしく私のからだにまわし、私の手に「わたしは Helen を愛します」と書かれました。

「愛って何ですか」と私は尋ねました。

先生は私をさらに、ぴったりと引きよせて、「愛って、こゝにあります」と私の心臓を指さしながら言われました。すると私はその時初めて、心臓の動悸を感じました。先生のことばはとても私を面喰わせました。私はその頃は何んでも触ってみなければわからなかったからです。

私は先生が手にしている堇を匂ってみて、なかばは言葉で、なかばはサインで、「愛って花のよい匂いのことですか」とたずねました。

「いえ」と先生は言われました。私は再び考えました。暖かい太陽が私達にさしていました。

「これが愛ではないんですか」と私は暖かさがさしてくる方向を指さしながら、たずねました。「これが愛ではないんですか」と。

私には太陽ほど美しいものがあろう筈はないと思われました、太陽の暖かさはあらゆるものを成長させるからです。でも、サリバン先生は頭を横に振られました。私はとても面くらって、がっかりしました。先生が愛というものを私にみせて下されないなんておかしいと私は思いました。) 22歳の Helen が6、7歳のめいしの純情な Helen の気持ちになって淡々と書いている。その飾らぬ文体こそは天来の声であろう。聾啞少女に、「考える」とか「愛する」などと言う掴みどころのない無味無臭で透明な「ことだま」の真意を掴ませるにはどのようにあらわしたらよかろう。Helen の筆はさらに、彼女の生活の一コマの具象的な事件に托して、抽象の説明に入る、これは蓋し、Sullivan 先生が彼女の薫陶を身にしみ入るまで繰返された方法であった。それが彼女の霊筆となって次のように述べられている、

A day or two afterward I was stringing beads of different sizes in

symmetrical groups—two large beads, three small ones, and so on. I had made many mistakes, and Miss Sullivan had pointed them out again and again with gentle patience. Finally I noticed a very obvious error in the sequence and for an instant I concentrated my attention on the lesson and tried to think how I should have arranged the beads. Miss Sullivan touched my forehead and spelled with decided emphasis, “Think.”

In a flash I knew that the word was going on in my head. This was my first conscious perception of an abstract idea.

For a long time I was not thinking of the beads in my lap, but trying to find a meaning for “love” in the light of this new idea. The sun had been under a cloud all day, and there had been brief showers; but suddenly the sun broke forth in all its southern splendour.

Again I asked my teacher, “Is this not love?”

“Love is something like the clouds that were in the sky before the sun came out,” she replied. Then in simpler words than these, which at that time I could not understand, she explained: “You cannot touch the clouds, you know; but you feel the rain and know how glad the flowers and the thirsty earth are to have it after a hot day. You cannot touch love either; but you feel the sweetness that it pours into everything. Without love you would not be happy or want to play.”

The beautiful truth burst upon my mind—I felt that there were invisible lines stretched between my spirit and the spirits of others,(Ibid.)

「1, 2日して、私は釣合いのとれたグループになっている幾組かの大小様々のビーズ玉を糸に通して遊んでいた。——大きいのを二つ、小さいのを三つ、といった具合に。ところがやってみると色々間違った。そこで、Sullivan先生は優しく、辛棒して、間違いの所を幾度も繰返し指摘して下さった。やっと私はビーズを間違っ通してきていることがはっきり判った。一瞬その教えられた所に注意を集め、どんな具合にビーズを並べたらよかったのかと考へてみた。すると、先生は私の額に指を触れて、思い切り力を入れて「考えなさい」と綴られた。

一閃、その語が私の脳裏に生き生きとひらめいた。これが抽象的な概念を私がこれだと意識した最初でした。

長いこと私は膝のビーズのことなど考えませんでした。この新しい概念に照して、“love”の意味を見つけようと努めていたのです。太陽は終日雲の下にありました。ちょっとの間、俄雨が降ったが急に南の方がすっかり明るくなって、日が輝き出した。

私は再び先生に聞きました。「こんなのが love ではないのですか」。

「Love とは太陽が出る前に空にあった雲のようなものです」と彼女は答えた。それからもっと簡単なことばで次のように説明をされた。その時は私にはその意味が解らなかったのです。

「あなたは雲にさわってみることは出来ませんよね、でも雨は感じます、そして花や渴いた大地は暑い日の後に雨が来るのをどんなに悦んでいるかわかりますね。あなたは“love”にもさわれません、しかし、“love”が万物に注ぐ心地よさは感じますね。“love”がなければ、あなたは仕合せでもないし又遊びたくもないでしょう。」

ハッと麗しい真理と云ったものが私の心の中に閃いた。——眼に見えぬ線が私の精神と他の人々の精神との間につながっているような気持ちがしました。」（昭.53.9.20）